

本書では、障害のある子どもたちを学校教育に受けとめ、その人間的な発達の実現をめざす教育実践について、またその実践を担う「教師のしごと」についての私の考えを述べてきました。教育制度の問題を専門領域とする私が、なぜこのような文章を書き連ねてきたのか、その理由の一端は「はじめに」に記しました。ここでは、私が長年にわたって多くの先生方の教育実践の事実に触れ、語り合い、そこからたくさんの方のことを学んできたことを述べたのですが、ではなぜ私は、そのようなことをしてきたのでしょうか。もちろん、全障研の研究運動への参加そのものが大きなきっかけにはちがいないのですが、それとなく一つ一つの出来事がありました。以下は、連載を終えてホッとするまもなく、『みんなのねがい』2019年4月号に書いた文章の一部です。

* * *

私が大学院生の頃、就学問題を考える板橋連絡会という小さな会がありました。教職員組合の先生方、保育園の労働組合に集う保育士の方々の呼びかけで、公立および私立の保育園の先生方、小・中学校、特別支援学校の先生方、乳幼児健診に携わる保健師さんたちなど、障害のある子どもに関わるさまざまな職種の人たちと、地域の障害児の親の会に集

う保護者の方々が集まってこられました。

会が発足して間もない頃、ある若いお母さんが、「私自身も学校の勉強はよくわからなかったし、楽しかった思い出はむしろ友だちとの関係や部活のことです。どうして、障害のある子どもだけ、勉強についていけないからという理由で地域の学校に入れてもらえないのですか。わが子はたとえ勉強がわからなくても、地域の学校、通常学級にいかせたいのです」と発言されました。「子どもにあった学校を選んでほしい」と思って参加していた私は、どう応えたものかと考え込んでしまったのですが、集まっておられた保育士さんや先生たちは、「そうですね。そういうこともこれから一緒に考えていきましょう」と、そのお母さんの発言を受けとめられました。

二カ月に一回ほどの集まりだったと思います。小学校や養護学校での教育の実際や、就学先を決めるための手続きなどについて、毎回少しずつ学びがありました。はじめのうちは緊張感もありましたが、参加された保護者には毎回必ず発言していただき、少しずつ打ち解けてきたある日、先のお母さんが、こんな発言をされました。

「障害のない子どもでも、たとえば目が悪ければ前の方の席にするなど、いろんな配慮がされますよね。そんなふうには、わが子にあった指導や支援を通常学級なかでしてもらえないなら、それはぜひしてもらいたい。少しでも授業に参加したり勉強がわかるように助けてほしいと思います。でも、そう言う『それができるのは障害児学級や養護学校です

よ』と言われそうで、私は『勉強はわからなくてもいいです』と言わざるを得ないんです。それまで、「勉強はわからなくてもいい」という考え方をまず変えてもらわないと…と思っていた私は、自分の認識の浅薄さに気づきました。わが子にあった教育を、障害のない子どもたちと切り離されないかたちで実現してほしい、というのが、このお母さんの本当のねがいだったのです。けれども、それは到底実現しそうもない。そんな見通しのなかで、仕方なく「勉強はわからなくても…」と言わされてきたのではないか。そして、表明されたことばの背後にある本当のねがいは、何回も顔を合わせて互いの思いを交流し、安心できる関係を築いてくるなかで、やっと話してもらえたのではないか…。

「ニーズ」ということばが流行りだした頃でした。「保護者のニーズは多様」などとも言われましたが、学校教育へのお母さんたちのねがいは、本当は「多様」、つまり、バラバラで一人ひとりちがうといったものではなくて、「多彩で多面的」「表明される「多様な」ニーズの一つ一つが、本当はどれも大切」ととらえるべきではないか、そんなことに気づいていく糸口をいただいた忘れがたい出来事です。（『みんなのねがい』2019年4月号）

* * * * *

学生時代のこの経験は、私のうちに、少なくとも二つの大きな影響を残しました。一つは、文中にも記した「表明されたことばの背後にある本当のねがい」についての認識、そしてもう一つは、そうした「本当のねがい」を表明できるような場を生み出すために、職

種のちがいを越えて手をつなぎ、力を合わせてこられた（教職員組合の先生方、保育園の労働組合に集う保育士の方々）への、ある意味で直観的ともいってよい信頼です。こうした経験などが契機となって、私は（現場の教育実践とそれを担う教師のしごと）に学ぶということ、自らの基本的なスタイルにしてきたのだと思います。そして、その（直観的な信頼）は、ほとんどの場合裏切られることなく今日に至っています。先の文章につづけて、私は次のように書きました。

* * * * *

一人で困難に立ち向かおうとする時、困難な現実のある一面だけに目を奪われて、本当のねがいを見失ったり、それを表明する勇気を奪われたりしがちです。けれども、本当のねがいは内奥に隠したままで、表明された「ニーズ」の実現をはかるだけでは、障害のある人とその家族の権利を守り、発達を保障していく道筋を見通すことはできません。

本当のねがいを見失わされるのは、障害のある当事者や家族ばかりではありません。障害のある人たちの役に立ちたい、障害のある人たちの人間らしく豊かな生活の実現に自分の人生を重ねたいと願って、障害児教育や障害児者福祉などの仕事を志した人たちも、困難な現実の前に、「今の現実ではこうしかならない」「そういう現実をわかっていない保護者、利用者には困ったものだ」などと思わされかねません。「ひとりぼっち」は、このようにして一人ひとりの本当のねがいを奪い、手をつながなければならぬ人同士のあいだ

に対立を持ち込みます。これを許すと、現実の社会のうちにあって解決が図られるべき問題が、仲間同士の問題に置き換えられてしまつて、手をつないで問題の解決に挑んでいく力まで奪われることになってしまいます。だからこそ私たちは、立場や職種、年齢や経験のちがいを超えて、つどい、語り合うこと、ひとりぼっちをなくすことをなによりも大切にしたいと思います。

* * *

本書もまた、たくさんの人たちの力を借りて、なんとかかたちにすることができたものです。各章でその実践の一端を紹介させていただいた先生方はもちろんですが、とりあげることのかなわなかった多くの方々の実践に触れ、学ばせていただいたことも本書の大切な礎となっています。それとやらんで、それぞれの職場で大切な任務を担いつつ、毎月の『みんなのねがい』を作り、届けてくださっている『みんなのねがい』編集部の方々、毎月届けられる同誌を実に丹念に読み、時にやさしく、時にきびしいコメントを寄せてくださる編集委員の方々、そして、そうした人たちのしごとをつなぎ、全障研という手弁当の研究会の活動を日夜支えてくださっている全障研出版部職員の方々。これらの方々力なくしては本書が世に出ることはありませんでした。

本書のもとになった連載の際には、全障研出版部の黒川真友さん、社浦宗隆さんにとりわけお世話になりました。また、本書の準備過程では同じく社浦さんにひとかたならぬご

援助をいただきました。記して深甚の感謝を申しあげるとともに、「立場や職種、年齢や経験のちがいを超えて、つどい、語り合う」研究運動、「ひとりぼっちをなくす」活動のなかであつて、自らの役割を果たすことで、より実質的なお礼をしたいと期しています。

越野和之